

令和6年度 フランス国立パリ聾学校 (INJS) との交流

～オンラインと訪問交流を通じた国際理解の深化～

澤口 真弓・久川 浩太郎・藤本 裕美子・岡本 三郎

大谷 典子・伊藤 海・鎌田 ルリ子

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、平成15年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校協定を締結して以来、オンライン交流や相互訪問交流などで交流を重ねてきた。令和2年度から令和4年度にかけては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、相互の学校を訪問する対面型の交流が実施できなかった。令和5年に新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類に移行されたことを受け、本校にパリ聾学校の生徒を招き、再び対面型の交流を実施した。令和6年度に行ったオンライン交流と訪問交流の様子と成果について報告する。

キー・ワード：国際交流 訪問交流 オンライン交流 コミュニケーション 異文化理解 外国語学習

1 はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校(以下、本校)は、海外の聾学校(フランス、韓国、台湾等)との交流を行う「国際教育推進事業」に取り組んでおり、相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者の受入れを通し、生徒の国際的資質を育て、これからの国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。さらに、生徒が国際教育推進事業を経験することにより、将来、聴覚障害者の集団や地域社会や職場で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。

フランス国立パリ聾学校(Institut National de Jeunes Sourds de Paris: 以下、パリ聾学校)との交流は、平成15年の姉妹校協定の締結から始まり、相互訪問交流を平成25年度から行っている。本校がパリに訪問する際はパリ聾学校やパリ市内で生徒間交流を行い、異文化理解・交流を深めることで、国際的視野を広げることができた(久川ら、2020)。また、オンライン交流も年に数回行っており、単発の交流にとどまらず、継続的に交流を行うことができています。令和元年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、現地に訪問する対面での交流を行うことができず、代わりにオンラインでの交流のみを実施してきた。オンライン交流を経験した多くの生徒が、交流を通して外国語や海外の文化に

興味をもったと回答する一方で、オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じたという回答が多く見られた(田中ら、2023)。令和5年度は新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、季節性インフルエンザと同等の「5類」へと移行されたことを受け、本校にパリ聾学校の生徒と教員を招き、対面型の交流を実施した。また、オンライン交流も行い、対面型とオンライン型それぞれにメリットがあり、それぞれの場面や方法に応じた交流の工夫が見られた(田中ら、2024)。

本稿では、令和6年度に行ったオンライン交流と訪問交流の様子と成果について報告する。

2 パリ訪問交流参加の抽選・事前学習

(1) 交流参加の抽選

令和6年度のパリ訪問交流の抽選は、8月30日の放課後に行った。パリ訪問交流の対象者は本校高等部普通科1、2年生で、募集人数10名のところ、23名の申し込みがあり、生徒のパリ訪問交流に対する興味関心の高さが伺えた。コロナ禍で修学旅行や海外旅行ができない時期を経験していた生徒たちであったため、渡仏への期待は高かったようだ。抽選実施後、参加者に対してパリ訪問の行程や今後の流れを説明し、準備の心構えや見通しをもてるようにした。

(2) 事前学習

① グループ別学習

フランスに対する生徒の興味関心が高い分野を確認するためにアンケートを実施し「フランスの食文化・スイーツ」「フランスの歴史」「フランスの芸術」「フランスの文化・マナー」「フランスの建築・交通環境」の5つのテーマでグループ別学習を行い、各グループの調べ学習の結果をパリ訪問交流のしおりに掲載した。

② フランス手話の練習

パリ聾学校の事前学習として、フランス手話の練習を行った。内容は自己紹介や簡単な挨拶で、フランス手話の動画や指文字表などを利用した。動画をアプリで共有し、繰り返し練習できるようにした。

オンライン交流でも、訪問交流でも自己紹介は通訳を介することなく挨拶と自己紹介を行うことができた。

3 オンライン交流

(1) 実施の手続き

訪問交流の事前学習の一環としてオンライン交流を行った。本校高等部普通科の交流担当者がパリ聾学校の教員とメールで連絡を取り合い、時差を考慮した実施日時や、参加する生徒数、実施の方法、内容等について検討を行った上で、11月8日にオンライン交流を実施した。

日本とフランスでは8時間の時差があるため、日本時間の16:30(部活動の時間に相当)、フランス時間の8:30(1時間目の時間に相当)に開始し、1時間程度交流を行うこととした。

オンライン交流では多人数でのやりとりが難しくなることや、放課後の活動であること、また3年生は進路実現に向けた学習の優先度が高まる時期であることなどを考慮し、交流への参加は希望制とした。事前に希望調査を行い、訪問交流参加予定者10名を含む20名(1年生13名、2年生2名)の生徒が参加することとなった。これまでパリ聾学校とのオンライン交流に参加した回数は、今回初めて参加する生徒が18名で、2回目2名であった。また、参

加するきっかけは、「国際交流に興味があったから」が16名で最も多かった。訪問交流の参加生徒同士で交流内容を話し合い、本校や日本の文化を発表することとした。発表内容は「本校の文化祭」「日本のお菓子」「日本のアニメ・漫画」「日本の行事・文化」とし、それぞれ2～3名が担当となりスライド資料を作成した。

スライド資料はPowerPointを使用して作成し、英語やフランス語、写真やイラストを多用し、伝わりやすいように工夫したものであった。スライド資料は事前にパリ聾学校に送ったため、交流前に確認してもらうことができた。

(2) 交流の実施

① 機材や教室内配置

オンライン交流は、参加者全員が集まれる多目的スペース(以下、教室)を会場とし、常設されている大型のスクリーンとプロジェクターを使用して行った。通信機器は、本校のコンピュータとパリ聾学校のコンピュータをインターネットに接続し、前年度までと同様にWeb会議システムZoom(以下、Zoom)を使用した。

発表者の撮影は、Webカメラを外部入力で使用した。また、スライド資料の提示はZoomの画面共有機能を使った。発表者用のコンピュータ1台、タブレット端末1台の他に、2台のコンピュータでZoomのミーティングに参加し、それぞれを教室の後方の大型テレビに接続し、サブモニターとして使用した。全ての画面で、①Zoomのミーティング画面、②発表用プレゼンデータ、③生徒が意見交換をしたり、本校とパリ聾学校の教員同士が必要な連絡を交わしたりするためのチャット画面を同時に見られるようにした。これにより、画面上の情報がより細かに共有されやすい環境となった(Fig.1)。

さらに、2台のサブモニターの間には、机を配置し、その上に白紙とペン、ホワイトボード等を準備し、Zoomのチャット機能以外に手書き(筆談)による伝達方法も選択できるようにした。これは、キーボード入力が苦手な生徒や手話や身振り・表情を文

字情報と同時に伝えたいと考える生徒のニーズに対応するためである。

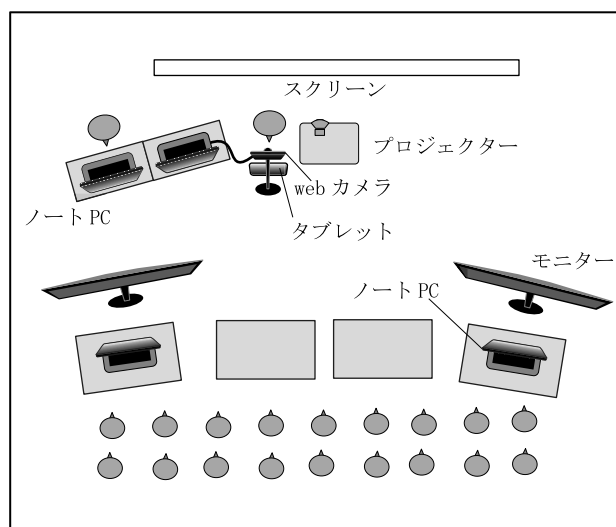


Fig. 1 教室内の配置

② 交流の内容

パリ聾学校からは6名の生徒がオンライン交流に参加した。2名の生徒が早く登校したため、全員の生徒が揃うまで、ホワイトボードに英語の文章を書いてフリートークを行った。

パリ聾学校の全員の生徒が揃うと、本校の生徒がグループ発表を行った。発表の合間には、パリ聾学校からの質問の時間を設け、双方向のやりとりを深められるように配慮した。

例えば、「日本のお菓子」のグループは、生徒が良く食べる駄菓子和菓子の紹介をした。発表終了後は「どうして11月11日がポッキーの日なのか」「11月11日は私の誕生日」「フランスにはどんなお菓子があるの」「好きな食べ物は何」といったやりとりがなされた。

(3) 質問紙調査結果

オンライン交流実施後、Microsoft Formsを使用した選択式及び記述式の質問紙調査を、訪問交流参加予定者に実施した。選択式の質問は10項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝5点」、「そ

う思う＝4点」、「どちらでもない＝3点」、「そう思わない＝2点」、「全くそう思わない＝1点」として、平均を集計した (Table 1)。

Table 1 質問紙調査結果 (n=10)

質問項目		平均
①	オンライン交流の準備やフランス手話の練習時間がもっとほしかった。	4.0
②	交流相手に分かるように工夫できた。	3.9
③	交流時間 (約 90 分) は短かった。	3.2
④	今回の交流を通して、外国語でのやりとりに興味を持った。	4.6
⑤	今回の交流を通して、外国語をもっと学習したいと思った。	4.6
⑥	今回の交流を通して、フランスという国や文化に興味を持った。	4.5
⑦	今後も国際交流の機会があれば取り組んでみたい。	4.8
⑧	オンライン交流ではなく、実際にフランスに行って交流したいと感じた。	5.0

質問紙調査の結果、質問④～⑧が特に高い値となった。全ての生徒が「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的意見を答えており、オンライン交流を通して、外国語や外国に対する興味関心が高まったと考えられる。特に質問⑦、⑧の値が高く、国際交流への意識の高さが伺えた。発表後の質疑応答では、パリ聾学校の生徒からの質問が多くあり、パリ聾学校の生徒たちが日本文化や本校に興味を持ってくれたことも大きな刺激となったようである。

自由記述の中には、「コミュニケーション方法や雰囲気、そして漫画やスイーツ等国は違っても通じる所がある事を知ることができて、とても嬉しかった」「パリに訪問する際の生徒の様子や雰囲気が分かったのでよかった」「少しの会話だったけれど、お互い楽しそうな雰囲気で話しやすかった。現地に行った時、もっと話したいと思った」というような記述が見られた。訪問交流に参加する生徒の中には、海

外に行くことが初めての生徒もあり、不安を抱える生徒も見られた。しかし、オンライン交流を通して、パリ聾学校の生徒の様子やコミュニケーション方法を知ることができ、不安を抱えていた生徒たちも次第に安心感を得ることができたようであった。これらのことから、事前学習の一環としてオンライン交流を行うことの意義は大きいことが示された。

4 パリ訪問の様子

(1) 訪問行程

パリ訪問の4日間の行程を示した (Table 2)。訪問行程は、生徒の希望を基に、パリ聾学校や旅行会社と検討して決定した。

Table 2 パリ訪問4日間の主な行程

行程・実施内容	
12/9 (月)	パリ聾学校訪問交流 ・ 歓迎式典 ・ 昼食交流 ・ 校舎、施設見学 ・ 自己紹介 ・ プレゼンテーション
12/10 (火)	パリ聾学校訪問交流 ・ 体育の授業参加 ・ 昼食交流 ・ グラフィックの授業に参加 ・ エッフェル塔訪問
12/11 (水)	文化施設等観光 ・ ソルボンヌ大学施設見学 ・ パンテオン見学 ・ 昼食交流 ・ ノートルダム大聖堂、コンシェルジュリー（旧牢獄）見学 ・ クリスマスマーケット散策 ・ ルーヴル美術館見学
12/12 (木)	文化施設観光 ・ 凱旋門見学

(2) パリ聾学校訪問

① 本校のプレゼンテーション

パリ聾学校に到着後、校内のド・レペホールで歓

迎式典が催された。昼食交流後、ド・レペホールにて本校の生徒が自己紹介、日本の行事、本校の部活動、和食についてプレゼンテーションを行った。

ホールのプロジェクターにプレゼンテーションスライドを投影し、フランス手話で挨拶をし、英語、手話、ジェスチャーでプレゼンテーションを行った。生徒が手話で表現した部分を本校教員が読み取り、音声に変え、その音声の日本語をフランス語とフランス手話に通訳してもらったが、生徒は日本語→英語に翻訳する際に翻訳アプリ等を使用することが多く、自分で英単語を丁寧に調べていないので英単語の意味、発音が分からないまま、英語で伝えようとして失敗することが多く見られた。

② 体育の授業への参加

事前指導の際に「パリ聾学校でやりたいこと」を生徒に聞いたところ、「授業に参加してみたい」との声が多く、12月10日の午前中は体育の授業、午後はグラフィックの授業に参加した。体育の授業では本校のバレーボール経験者がリーダーとなりパリ聾学校生徒、本校生徒を混ぜた4チームを編成しバレーボールを行った。本校生徒、教師、パリ聾学校生徒、教師がジェスチャー、手話、フランス手話、英語を使いながらコミュニケーションをとり、楽しくバレーボールをすることができた。互いの手話が分からなくでも、スポーツを通して、ジェスチャーや身振りで1つの目標に向かって協力することができる良い機会になったようだ。

③ グラフィックの授業への参加

午後はグラフィックの授業に参加した。パソコンでデザインを作成し、大きなシールにプリントし、そのシールを切り抜く作業を本校生徒とパリ聾学校の生徒で行った。グラフィックで使用する教室には、パリ聾学校卒業後、就職してすぐに制作作業をするために、実際に企業で使用されている大型の機械が多く設置されていた。

(3) 文化施設観光

① エッフェル塔訪問

12月10日の夕方にエッフェル塔に上った。エッ

フェル塔の入り口では多くの人々が並ぶ中、パリ聾学校の教師と一緒に障害者向けの優先ルートを通り、3つのエレベーターを乗り継ぎ、最上階まで上がった。

② ソルボンヌ大学、パンテオン見学

パリ訪問3日目の午前中はパリ聾学校の教師、生徒と共に世界最古の大学の1つであるソルボンヌ大学、フランスの偉人が眠る霊廟のパンテオンを見学した。ソルボンヌ大学では、施設の担当者から説明があり、大学の施設や絵画について説明があった。パンテオン見学では、小説家のヴィクトル・ユゴー、哲学者のジャン=ジャック・ルソーの棺を見学した。

③ ノートルダム大聖堂見学

パリ訪問3日目の午後は、ノートルダム大聖堂を見学し、その後クリスマスマーケットで買い物をし、ルーヴル美術館に行った。2019年に大規模な火災で被害を受けたノートルダム大聖堂は、修復作業が行われ、2024年の12月に内部が一般公開された。パリ聾学校の教師がパリ市民にとってノートルダム大聖堂は重要な意味を持ち、修復されて嬉しいと話してくれた。パリ聾学校の教師はノートルダム大聖堂を“*She is so beautiful.*”と表現し、「フランス語には英語の *it* のような単数の代名詞がなく、大聖堂は女性名詞なのでこのように言った。」と話してくれた。フランス語に慣れていない生徒にとっては珍しかったようで、パリ聾学校の教師が書いたホワイトボードの文字を写真に収めていた。歴史ある建築物を見て、パリ市民の感性に触れることで言葉や表現1つ1つに興味を持ち始めたようであった。

④ ルーヴル美術館見学

夕方5時頃、パリ市内観光で行ってみたいという意見が1番多かったルーヴル美術館に行った。生徒は展示されている絵画や彫刻の大きさに驚き、教科書や本で見たことがある有名な作品に見入っていた。

5 事後アンケート調査結果

パリ訪問後、Microsoft Formsを使用した自由記述によるアンケート調査を行った。アンケート項目は、①事前学習の内容、②パリ聾学校との交流で印

象に残っていること、③パリ聾学校との交流でよかったこと、④パリ聾学校との交流でうまくいかなかったこと、⑤文化施設観光や散策等で印象に残っていること、⑥全体を通して学んだことや今後取り組みたいこと、の6項目とした。

①事前学習の内容についての記述では、事前学習の回数は丁度良く、事前学習の内容は、今のままだでもいいとの意見が多くあったが、プレゼンテーションの練習をやればよかった、といった記述が多くあった。また、一部事前学習の回数をもっと増やしてほしい、と意見があった。2学期は行事が多い中で予定を調整し、部活動がない木曜日の放課後を事前学習の時間にあてたが、オンライン交流の準備を除くと計5回のみであった。事前学習の時間の確保、プレゼンテーションの発表の練習、フランス手話の練習時間の確保が今後の課題である。

②パリ聾学校との交流で印象に残っていることについての記述では、パリ聾学校の生徒が積極的にコミュニケーションをとってくれたこと、ASLが使えるパリ聾学校の生徒が多かったこと、日本に興味を持ってくれている生徒が多かった、と記述が多かった。パリ聾学校の生徒とのコミュニケーションはスマートフォンの翻訳アプリを使用するだけではなく、お互いの手話を覚えていき最終的にコミュニケーションを取りやすくなったとの回答もあった。パリ聾学校では普段は学校でのスマートフォンの使用を禁止しているので、今回の交流でも頻繁にスマートフォンを使用するのではなく、ASLができる生徒同士が助け合い、ジェスチャー等を交えながらコミュニケーションを通し、スポーツや授業の体験を通して互いの言語を理解していたようである。

③パリ聾学校との交流でよかったことについての記述では、パリ聾学校の生徒に積極的に話しかけることができた、日本の手話とフランス手話を教え合うことができた、と記述が多く見られた。現地でパリ聾学校の生徒にフランス手話の挨拶をし、会話をスムーズに始めることで、異なる言語話者同士でも話しやすい雰囲気が生まれたようである。

④パリ聾学校との交流でうまくいかなかったこ

とに関する記述では、プレゼンテーションの発表がうまくいかなかった、との意見が多かった。改善方法として、事前学習で発表の練習をし、プレゼンテーションを手話で表現したあと、ジェスチャーで表現するとよい、と記述があった。事前指導の際には、手話の練習をするとともに発表の練習、機械等の動作を確認し、生徒一人一人が自信をもって発表できるよう丁寧に指導する必要があることが分かった。

⑤文化施設観光や散策等で印象に残っていることに関する記述では、パリの美しい街並みと観光した文化施設に感動したという記述が多かった。ノートルダム大聖堂をパリの人々が呼ぶときは it（それ）ではなく she（彼女）を使うことが特に驚いた、ノートルダム大聖堂が深く愛されていることが分かり、またフランス語と英語の違いも理解することができた、と記述があった。このことから、学校内の交流だけでなく、文化施設を見学し、現地の人と交流することで新たな発見があり、学びにつながるということが分かった。

⑥全体を通して学んだことや今後取り組みたいことについての記述では、訪問交流に参加したことでフランスやフランス手話に以前より興味をもつようになった、交流をきっかけに外国の手話や外国の文化により興味をもつことができた、今後は自分で海外に行ってみたい、と記述があり、外国語、手話、文化について興味が深まり、より国際交流に興味を持つことができたようである。代表的な記述を挙げる。

- ・外国の手話に興味を持った、考えを主張するところがとてもいいなと思った。また外国に行きたいし、たくさんの文化を体験して合わせる事ができるように取り組みたい。
- ・パリ交流をする前は海外の人に対して抵抗感があったけど、様々な国の人とたくさん関わってみていいなと思うようになった。海外に関わる大学や仕事に興味を沸いた。
- ・今回を通して、フランスの手話やフランス語をもっと知りたく、覚えたい！と思い始めた。そして、地域によって、意見や考え方が違うので、それぞ

れを尊重しつつコミュニケーションを交えたいと思った。

6 まとめと今後の展望

パリ聾学校訪問交流をきっかけにフランスとフランス手話に興味を持ち、文化施設観光や現地での交流を通して様々な文化や歴史に触れたことで異文化への理解が深まり、外国語や国際交流への意識が高まったことが分かった。

今後は、生徒が記述した感想を基に反省会を行い、パリ訪問交流を振り返り、パリ聾学校に対して礼状を送付する。また、令和7年1月下旬には、訪問交流での体験や学びについてまとめたものを、高等部普通科内の事後報告会で発表する予定である。令和7年5月にはパリ聾学校が本校に来校予定であるため、今回の訪問交流で学んだこと、感謝の気持ちを大切に、パリ聾学校の生徒、教師を歓迎し、充実した交流にしたい。また、相互訪問交流とオンライン交流を継続的に実施し、今後も生徒の国際理解を深めていきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

- 久川浩太郎・澤口真弓・荒川郁朗・福地陽・石井清一 (2020) 令和元年度フランス国立パリ聾学校 (INJS) 訪問交流の報告. 筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要. 42, 102-107.
- 田中豊大・澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎 (2023) 令和4年度フランス国立パリ聾学校 (INJS) とのオンライン交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 45, 95-100.
- 田中豊大・澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎 (2024) 令和5年度フランス国立パリ聾学校 (INJS) との交流～対面型とオンライン型を通して～. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要. 46, 48-55.